

観光事業者ヒアリング結果について

令和 8 年 7 月 31 日

大糸線（糸魚川・南小谷間）沿線地域公共交通検討会議事務局

■ 観光事業者ヒアリング結果の概要

調査目的

第2回検討会議における現状分析について、観光交通に係る情報が不足していたと考えられることから、観光関係者目線での大糸線の評価に関する情報や、将来の観光需要に関する認識等について、ヒアリングにより定性的に把握する。

対象

宿泊施設（ホテル・旅館・ペンション等）

観光施設（索道事業者、観光協会等）

実施方法

糸魚川市

➡糸魚川市観光協会の協力のもと、会員に聞き取り調査
（7/24 回答）

小谷村

➡住民意見交換会に参加した観光事業者に聞き取り調査
（7/23（木）14:00～15:50 梶池高原総合センター 14名参加）

① 観光関係者目線での大糸線の評価等

□大糸線の利用に関する印象や評価

糸魚川市

「大糸線は、登山シーズンやフォッサマグナパークへ行く際の交通手段としての需要が大半である印象のため、部分的に貢献していると感じる。」
インバウンドの動きとして

「主に白馬方面への乗り継ぎの関係で、糸魚川駅での滞留は大きく増加傾向にある」

「（鉄道より）増便バスを利用している人の方が多くいると感じる」

小谷村

「地域観光への貢献は感じるが、南小谷駅からの交通手段がないため白馬駅から来場することが多いことなどから、最寄り駅の認識が「南小谷」→「白馬」になっていることは否めない。」

「現状の大糸線は、特定の季節や個人旅行者、鉄道ファンの来訪を支える側面はあるものの本数やダイヤ等により、宿泊全体の送客力としては限定的と言わざるを得ない。」

□駅からの二次交通による移動や送迎実態

糸魚川市

「観光地のほとんどが点在しているため、自家用車やレンタカー以外の来訪者においては、二次交通が不可欠である」

「鉄道など自家用車以外で来訪する客層の多くは、高齢世代や個人、夫婦など小規模であるため、タクシーやバスの充実が重要と考える」

小谷村

「南小谷駅まで送迎を行っている」

「鉄道で来られると、そこからの交通がないので、南小谷駅や白馬大池駅に迎えにいかなくてはいけない。それなら、白馬で降りてもらって、シャトルバス等でこちらに来てもらった方がいいという現状もある。」

まとめ

- ・本数・ダイヤが少ないことから、鉄道単体では観光地への移動手段として利用しづらい。
- ・鉄道を利用する場合、駅から観光地・宿泊地への移動は、宿泊施設による送迎やバス・タクシー等の二次交通によって補完されている実態。

■ ② 将来の観光需要・期待（インバウンド・広域観光）

□ インバウンドに対する声

糸魚川市

「冬季はオーストラリアやアジアが多く、グリーンシーズンになるとスイスが最も多い」

「これまでの台湾を中心とした誘客を、スイスをはじめとした欧米に切り替え、市内旅行事業者と連携した誘客を行う方針」

小谷村

施設の実感としては【国内客：国外客＝5：5程度】

「冬期を中心にアジア圏や欧米圏を中心としたインバウンドのお客様が非常に高い割合占めており、館内や周辺でも多くの海外からのお客様で賑わっている。」

「冬期来場者としては、豪州などが割合的には多いが、タイ・シンガポール・インドネシア等も増加傾向」

「外国人観光客に向けて、駅から目的地までのルート案内や、タクシー・バスの利用方法を多言語でスムーズに確認できる仕組みづくりがあると安心」

□ 広域観光・滞在型観光に対する声

糸魚川市

「名古屋方面から新潟への旅行需要が高まる傾向や、静岡・山梨・長野・新潟の中央4県の連携も今後活発になることから、それらの地域も見据えた誘客を検討している」

「今後開発が進む妙高のPCG開発によって来訪する富裕層を白馬エリアも含めた広域での周遊観光を検討していく」

小谷村

「糸魚川方面に行くことで海産物などに触れられるメリットもあるので、糸魚川方面へのアクセスを強化すれば滞在中の周遊も増えると思う」

「周遊パスや宿泊チケットなどを広域に売り出したり、モデルルートを示すことで観光誘客につながると思う」

まとめ

・インバウンドの来訪実態や誘客方針の考え方、需要増への期待感と併せて、多言語対応の必要性が挙げられた。

・地域において、海・山の観光資源を組み合わせた広域周遊や滞在型観光の可能性に期待する意見があった。

③ その他

□ 運休に対する声

糸魚川市

「大糸線は、運休のリスクが高く、商品造成が難しい（造成には相応のリスク補償が必要）」

小谷村

「雪道に慣れないお客に安全に来てもらうため大糸線を案内することが多いが、実際には降雪時の運休が多いため案内も躊躇する」

「運休も多く、観光客の足としてアテにはならない。」

□ 観光資源としての活用に関する声

糸魚川市

「景色は確かに美しいが、他にも同じような景色があること、沿線観光地があまりなく他の候補地と比較した際に埋もれてしまう」

「雪月花乗り入れなど、この地域でしかないものであれば需要は見込める」

小谷村

「大糸線の車窓も、大事な観光への売りとなると思うし、“おもてなし”として考えて欲しい」

「今の大糸線に求められているのは、観光のために人を運ぶ路線であって、観光資源として活用する路線とは分けるべき」

まとめ

- ・ 運休が多いため、観光客の移動手段として案内・利用しづらい。
- ・ 車窓景観など観光資源としての価値を評価する声がある一方、沿線観光資源の少なさや他地域との差別化を課題として指摘する意見が挙げられた。
- ・ 「観光客を運ぶ交通機能」と「観光資源としての活用」を分けて考えるべきとの意見が挙げられた。

まとめ

観光事業者ヒアリングから確認されたこと

①観光関係者目線での大糸線の評価等

- ・本数・ダイヤが少ないことから、鉄道単体では観光地への移動手段として利用しづらい。
- ・鉄道を利用する場合、駅から観光地・宿泊地への移動は、宿泊施設による送迎やバス・タクシー等の二次交通によって補完されている実態。

②将来の観光需要・期待

- ・インバウンドの誘客方針の考え方や需要増への期待感と併せて、多言語対応の必要性が挙げられた。
- ・地域において、海・山の観光資源を組み合わせた広域周遊や滞在型観光の可能性に期待する意見があった。

③その他

- ・運休が多いため、観光客の移動手段として案内・利用しづらい。
- ・車窓景観など観光資源としての価値を評価する声がある一方、沿線観光資源の少なさや他地域との差別化を課題として指摘する意見が挙げられた。
- ・「観光客を運ぶ交通機能」と「観光資源としての活用」を分けて考えるべきとの意見が挙げられた。



観光需要の増加や広域観光の可能性を期待する声がある一方で、観光客の移動手段としては、大糸線のみでは完結できていないことから、接続性や安定運行については観光事業者目線においても課題であることが改めて確認された。